

# 変わる日本の「暮らし」と「まち」

震災から力強く立ち上がる  
熊本のいまをたずねて

熊本県・熊本震災復興支援  
(2016年・平成28年)

阿部民子

text by Ranko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

日本初の肉食恐竜の化石が発見され、古くは醸造の町としても栄えた熊本県の御船町。歴史あるこの町を震度5強の地震が襲ったのは、2016年4月14日のことだった。自宅で入浴中だった米満洋一さんは、浴槽の湯が大きく波立つ様子で地震に気づいた。身の危険を感じ、妻の忠子さんと連れ立ち、避難所になっていた小学校に落ち着いた矢先の4月16日未明、震度6弱の本震が襲う。自宅は半壊。それから16日間、車中泊を余儀なくされたという。

それから3年10か月が経った2020年2月。お二人は、穏やかな笑顔で迎えてくれた。2019年12月に入居したという新居は、御船町の中心部に建つ鉄筋コンクリート造3階建ての災害公営住宅。落ち着いたまちになじむシックな色合いが印象的だ。

「部屋は3階なので、町全体が見渡せてるんです。夜は御船の夜景がとてもきれい。これからの季節は、城山と妙見坂の桜が楽しみ。二人では広すぎるくらいで、近くに住む孫にも『いつでも泊まりに

## 災害公営住宅全戸が完成

来てよかよ』って言ってるんですよ」と忠子さん(76)が言えば、「3階におられるご夫婦と毎日グラウンドゴルフに行くのが楽しみです。いまが一番いい。終の棲家です」と洋一さん(84)。二人の表情から、ようやく落ち着ける住まいを見つけた満足感と安堵が伝わってきた。

2016年に熊本県と大分県を襲った最大震度7の熊本地震。県のシンボルである熊本城が被災するなど、大きな被害をもたらした。UR都市機構は、発災直後の4月19日から職員を派遣。被災宅地危険度判定や被災建築物応急危険

度判定、応急仮設住宅の建設支援などの復旧支援に尽力した。

2018年には市内に熊本震災復興支援室を設置した。東日本大震災の復興支援を経て同室開所と同時に室長として赴任したURの菊地裕明は語る。

「URは、熊本県内の宇城市、嘉島町、御船町、益城町と協定を結び、熊本県内の災害公営住宅1715戸のうち、約4分の1の453戸を手がけるほか、益城町で復興土地区画整理事業の支援を行ってきました。工事では、阿蘇の伏流水を汚染しないようにするなど、熊本ならではの配慮をしました。昨年はゲリラ豪雨や台風などに見舞われましたが、くい打ち機などの台数を増やしたり、職人さんの増員のお願いをするなどとして、すべての災害公営住宅を今年3月にお引き渡し予定です。これで熊本におけるURの災害公営住宅の整備は完了を迎えます」

URは、基本設計から各種申請、工事の発注や現場監視までを一括して行い、完成した住宅を市町に譲渡する買取方式という手法をとっている。さまざまな被災地

でURが培ったノウハウを活用して、被災した市や町のマンパワー不足を補う大きな力となった。

御船町でURは一丁目地区(町営住宅二丁目第1団地)と古閑迫地区(町営住宅古閑迫団地)の2地区の災害公営住宅建設を担当した。御船町役場復興課住宅係主査の宮川登嗣さんにお話を伺った。

「町としては町営の住宅建設自体が約30年ぶりで、ノウハウが全くありませんでした。そんななか、URさんには東日本大震災での復興支援などの経験も元に、畳の部屋があったほうがいいとか、神棚の置ける場所を設けたほうがいいなど、標準設計の段階からさまざまなアドバイスをいただき、本当に心強かったです」

町との窓口となっているURの鈴木悠平もこう言う。「更地だったところに建物が建ち上がっていくのを見守るのは、感慨深かったですね。入居した方から『突然家がなくなっとうしろうかと思っただけ、こういう家に住めるようになってうれしい』とお声をいただくと、やりがいを感じます」

## 復興へ向けて力強く前進

URが熊本県内で建設した災害公営住宅は12地区。それぞれコミュニティ形成を促進するための趣向がこらされているのも特徴だ。

宇城市の豊野町響原地区の災害公営住宅では、和傘をイメージした柱梁が印象的な集会所や、地域の人も集える広場を設置。URは市や地域支え合いセンターとともに集会所でのお茶会の手伝いをしたり、昨年12月には敷地内の広場で地域交流イベントの開催に協力した。地区の小学生や隣接する特別養護老人ホームの方を招いて、にぎやかに交流を行った。

同じく宇城市の松橋町大野地区に今年2月完成した住宅では、広場に、住民にお花見を楽しんでもらえるようにシンボルツリーの桜を植樹した。また最も被害が大きかった益城町では4つの災害公営住宅を建設している。いずれも5階建てという規模の大きなもの。それぞれ集会所のほか花壇や広場、共同菜園などを併設。住民や近隣の方が気軽に集い、交流でき

るよう配慮されている。

熊本城大天守や石垣の復旧も進み、熊本空港やJR熊本駅前、中心市街地の再開発など明るい話題が増えている熊本県。御船町役場の宮川さんも「平成28年度から31年度の復旧期を終え、令和2年度から5年度までが復興期に入ります。来年4月にはコストコがオープン、まちづくりが着々と進んでいるのを感じます」と語る。

一丁目第1団地の入り口には、復興のシンボルとして、熊本県立御船高等学校書道部による書が掲げられている。「飛躍 この道は明日へと続く 一歩一歩踏みしめて進もう 頑張り御船町 輝く未来へ翔び立て」。その力強い文字に、熊本の未来が重ね合わさる。

## 図書カードプレゼント

本連載に関するアンケートを行います。ご参加いただいた方の中から、抽選で10名様図書カード3000円分をプレゼントします。

← 詳細は次ページをご覧ください。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

企画制作]新潮社